様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：47407
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：22760479
研究課題名（和文）　ケープ植民地における人種隔離空間の計画とその形成・変容・再編過程に関する研究
研究課題名（英文）A Study on Spatial Planning of Racial Segregation and the Spatial Formation, Transformation, and Reorganization in Cape Colony
研究代表者 佐藤　圭一（SATO KEIICHI）
尚絅大学短期大学部・その他・准教授
研究者番号：60435378

研究成果の概要（和文）：南アフリカの内陸植民都市の一つであるグラーフ・ライネを主な対象として、その人種隔離空間の構成について明らかにした。アパルトヘイト期に白人地区であった中心部が 18 世紀の建設当初のグリッド・パターンの都市形態を現在でも維持し、保存状態のよい植民地様式の住居が残る。一方、周辺に形成された黒人地区はバラックが建ち並び、アパルトヘイトの歴史を刻む一角もクリアランスの危機に瀕している。今後は周辺の非白人居住区を含めた保全計画が必要である。

研究成果の概要（英文）：The main objective of this study is an analysis of Graaf-Reinet, an inner colonial city in South Africa and its spatial formation of racial segregation. The central part of the town maintains a grid pattern since the beginning of the eighteenth century, when the town was newly laid out and had many colonial style houses. On the other hand, barracks were built up in a black area formed at the peripheral of the white area. In the black area, some blocks which were affected by the apartheid policy are faced with a crisis of clearance. In future, an effective conservation plan that covers both white and black areas is required.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：都市地域計画学
科研費の分科・細目：建築学・都市計画・建築計画
キーワード：南アフリカ、グラーフ・ライネ、人種隔離、グリッド・パターン、都市計画、ケープ植民地、植民都市、アパルトヘイト

１．研究開始当初の背景

発展途上地域の大都市は、植民都市に起源をもつものが多く、それらの都市が現在抱えている問題も植民地化と独立後の土着化の両過程に胚胎されている。研究対象とした南アフリカは、土着化の過程がアパルトヘイトという特異な統治体制の成立・確立期と重なり、その故に南アフリカ都市は世界の他都市には珍しい独自の特質を都市空間の構成また居住者属性においてもつ。この特質はアパルトヘイト廃止後のポスト・アパルトヘイト期においても持続している。

近年南アフリカ植民都市研究は、旧宗主国である英国やオランダおよび南アフリカにおいて蓄積されつつあるが、特定の都市に関するモノグラフ研究がほとんどである。またその関心も自国の植民地支配の時代にのみむけられており、旧宗主国間の比較研究には至っていない。オランダ植民都市研究の集大成として、K. Zandvliet による"Mapping for Money"(Batavian Lion International, Amsterdam, 1998)、共同研究者の一人であった R. v. Oers による"Dutch Town Planning Overseas during VOC and WIC Rule(1600-1800)"(Uitgeversmaatschappi Walburg Pers, 2001)が発表されているが、いずれも形態論にとどまっており、また、本研究が着目する 17、18、19 世紀それぞれに形成された都市群は考察の対象になっていない。

２．研究の目的

本研究は、18 世紀に建設されたケープ植民地（以下、「ケープ植民地」は、ケープタウンを中心に 18 世紀末までに拡大した南アフリカにおけるオランダ東インド会社支配領域を指す）の都市群を主な対象として、その形成過程とオランダ系からイギリス系白人へと支配層の変化にともなう空間変容、および人種隔離関連法による都市空間の再編過程を調査・解明し、現在でも高度に隔離された南アフリカ諸都市のポスト・アパルトヘイト期における都市空間再編計画の知見と指針を得ることを目的としている。主として着目するのはオランダ系白人であるボーア人の都市形成の手法とその後の人種隔離関連法施行による都市空間の変容であり、ケープ植民地への制度の適用による空間再編の歴史的過程とその実態を明らかにする。さらに本研究は、南アフリカ都市に限らず、多エスニシティ混住社会の都市構造の理解とその歴史的展望を得ることを大きな目的としている。

３．研究の方法

主に旧宗主国である英国、オランダにおける史・資料の収集と解読、南アフリカにおける臨地調査と収集データの分析の２つが研究方法の軸となる。南アフリカの主な調査機関は、ケープタウンの Surveyor General、South African Heritage Resources Agency (SAHRA)、Cape Archives とグラーフ・ライネの Graaff-Reinet Museum 、Camdeboo Municipality である。初年度に予備調査を行い重点調査地区を選定し、次年度に本調査、最終年度に予備調査を行う 3 カ年の研究計画である。臨地調査では、下記（１）、（２）が視点となる。

（１）　都市空間形成・変容

オランダ支配期の 18 世紀までにケープ植民地に建設された都市群(下記「都市群Ⅱ」)の都市空間構成を収集した資料の解読と臨地調査によって明らかにする。17 世紀に建設され研究蓄積のあるケープタウン（下記「都市Ⅰ」）とボーア人が集団での計画的な内陸移動に伴い 19 世紀に建設した南アフリカ内陸植民都市群(下記「都市群Ⅲ」)を比較の対象とする。ケープタウン（都市Ⅰ）に関しては、これまで研究蓄積があり、また都市群Ⅲについては、明確なグリッド・パターンで構成されたピーターマリッツバーグを中心に臨地調査を行い 19 世紀の都市形成過程や計画理念・手法について明らかにしてきた。本研究課題の対象とする 18 世紀のケープ植民地の都市群Ⅱに対して、これまでの研究によって明らかにした 2 つの比較都市（群）を設定することにより、ケープ植民地の拡大期における都市群Ⅱの特質をより明確にする。

都市　Ⅰ　ケープタウン
都市群Ⅱ　グラーフ・ライネ、ステレンボッシュ、スウェレンダム、タルバ
都市群Ⅲ　ピーターマリッツバーグ、ポチェフストローム、ルステンバーグ、ユトレヒト

統計資料、都市地図、航空写真、地籍図等を用いて GIS へデータ入力して分析を行い、都市空間の形成・変容過程を明らかにする。また、支配層や都市政策の変化が都市空間の変容に与えた影響について分析・考察する。

（２）アパルトヘイト体制崩壊後の空間構成

臨地調査によるデータ収集、分析を中心にアパルトヘイト体制崩壊後の空間構成を明らかにする。予備調査によって都市群Ⅱの各都市から、居住環境の実態解明が進んでいない非白人居住区に着目して重点調査地区を選定する。まず、航空写真や古地図と現状との比較を行い地区全体の変容を明らかにする。

４．研究成果

（１）グラーフ・ライネの概要

都市群Ⅱより、予備調査で選定したグラーフ・ライネ Graaff-Reinet を主な対象都市とした。グラーフ・ライネ（東ケープ、南アフリカ）は、ケープタウンから東へ約 600km、最寄りの港湾都市であるポートエリザベス（ネルソン・マンデラベイ）から北へ約 270km の南アフリカ内陸に広がる乾燥したカルー台地に位置する。1786 年にオランダ支配下の植民地として形成された 18 世紀末のケープ植民地における東部フロンティアの都市である。現在に至るまで 200 年間以上ほとんど変わらず整然としたグリッド・パターンの都市骨格が維持され、保存状態の良い 19 世紀

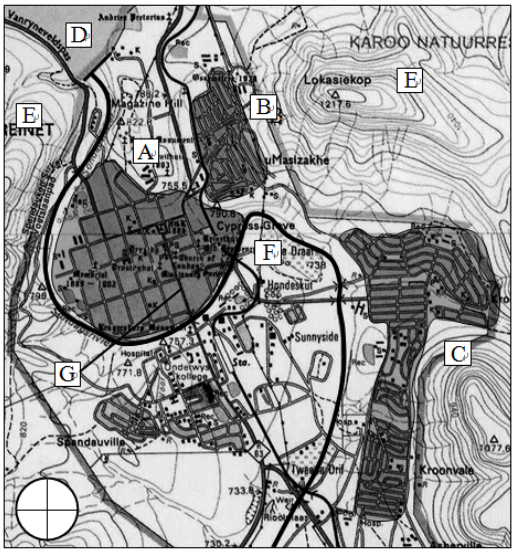
初頭の建築が数多く現存している。「ホース・シューHorse-shoe」と呼ばれる中心部は、サンディズ・リバーに3方を囲まれ全域に灌漑可能な立地であった。中心部の東西はカムデブーCamdeboo国立公園、北側はダム湖に隣接している。人口は現在約25,000人であり、市域は南方に拡張しつつある。ケープダッチ・スタイル、カルー・スタイル、ジョージアン・スタイル、ヴィクトリアン・スタイルなど南アフリカにおける18～19世紀の植民地期の様式建築が数多く残されている（図1）。

図1　Reinet-House
（現GR Museum、Parsonage St.）
（著者撮影、以下同じ）

（2）人種隔離空間の形成

1950年の集団地域法Group Areas Actによって、南アフリカの都市は全て、人種毎に居住区が隔離された。都心部は白人地区とされ、その周辺に非白人居住区が指定された。人種分類の根拠となったのは、同じく1950年の人口登録法Population Registration Actであり、白人、黒人、カラード、インド人の大きく4つに分類された。ここに至って人種隔離政策が深化する。アパルトヘイト体制である。1950年以降の南アフリカのアパルトヘイト・シティの計画理念は、人種毎の居住区を隔離して接触を最小限にし、各居住区内の人種構成を純化することである。1990年にアパルトヘイト関連法は全廃されるが、居住の自由が認められた現在に至るまで、人種隔離政策の傷跡は都市形態に色濃く残る。

グラーフ・ライネにおいては、東北部に黒人地区ウマシザケUmasizakhe、東南部にカラード地区クルーンヴィルKroonvaleが形成されている（図2）。それぞれの地区は一本の道でしか接していない。集団地域法以前のケープ地方の都市における人種隔離は比較的緩やかであり、各人種は混住していたとされるが 、1950年以降中心部の非白人はこれらの地区に強制移住させられた。



A: Graaff-Reinet (Horse-shoe)
B: Umasizakhe　C: Kroonvale
D: Noweba Dam　E: Camdeboo National Park
F: Sunday's River　G: Church St.

図2　グラーフ・ライネの人種隔離空間
（1:50,000地形図より作成）

（3）地域保全と植民地建築

アパルトヘイト政策末期の1980年代に、グラーフ・ライネ中心部の全建築の調査が行われ、約200件が順次国の文化財National Monumentsに指定されていた。しかし、1994年に黒人政権に変わると、文化財保護を担っていたNational Monuments Councilは解体され、植民地遺産を主とする白人主導の指定を全て破棄し、新たな法律に基づいて選定することとなった。その際設立されたのが、ケープタウンにあるSAHRAである。現在、Grading and Declarationsという部門が全国の物件の選定作業を進めているが、進捗状況は思わしくない。SAHRAで資料収集を行った際、グラーフ・ライネの担当者と直接話をする機会を得たが、はじめて現地調査を行ったのは2012年3月であった。

この遅々とした作業に対して、Roy Stauth博士を中心にBoard of Trustees of the Graaff-Reinet Museums (BTGRM)やGraaff-Reinet Heritage Society (GRHS)、そして地域住民は、2009年に地域保全の提案書を自ら作成し、SAHRAに提出している。興味深いのは、SAHRAが植民地建築を中心に従来の白人政権と同じ選定を推し進めようとしているのに対し、R. Stauth博士らは、黒人地区ウマシザケと周囲のカムデブー国立公園も含め、「複合遺産」として地域を一体化して保全すべきだと主張していることである。

現在、Cradock St.やParsonage St.などに多くの歴史的建造物が残る一方（図3)、中心部を貫く幹線道路（国道の一部）となっている Church St.沿いは激変している（図 4)。早急な対策が必要であるが、文化財指定の解除により強制力をもった地域保全プログラムが存在しないため、現在ではBTGRMなど地域の自発的活動だけがよりどころとなっている。Church St.と Parsonage St.の交差点にあるガソリンスタンドビルの高層化を話し合いだけで留保しているが、そうした努力も限界に達している。

図3　ケープダッチ・スタイルの住居（Cradock St.）

図4　開発が進む幹線のChurch St.

（4）黒人地区ウマシザケ

さらに深刻なのは、黒人地区ウマシザケである。アパルトヘイト期に都市計画から放棄されたこともあり、この地区の詳細な記録は残っていないが、20世紀初頭の写真からも地区の存在が確認でき、グラーフ・ライネの周辺地区として古くから存在していたことは明らかになっている。さらに詳細な調査が必要であるが、史料から少なくとも 19 世紀末までは遡及できる。この地区は黒人政治指導者の一人 M.R.Sobukwe の出身地区でもあり、ロイヤル・ブロックRoyal Blockと呼ばれる通りの住居（図 5）が、カルー・スタイルの原型を今に伝えている 。しかし、先に述べた通りこの地区は現在の SAHRA の構想では、保全の対象とされておらず、地区全体がクリアランスされ再開発される危機に瀕している。ロイヤル・ブロックだけを凍結保存しても、その存在意義は希薄となる。グラーフ・ライネの一部として、アパルトヘイト前後の歴史を刻んだ非白人地区全体の保全が望まれる。

図5 Royal Block（Umasizakhe）

（5）今後の課題

SAHRA の文化財指定作業を見据えながら、R. Stauth 博士らと連携し、ウマシザケを含め詳細に実施されていない保存対象建築の実測調査を行い地区の実態を明らかにしたい。歴史的地区の現況記録は、喫緊の課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）

<u>佐藤圭一</u>、グラーフ・ライネ（東ケープ、南アフリカ）における人種隔離空間の形成と地域保全に関する考察、日本建築学会大会、東京、『学術講演梗概集』 F-1 pp.727-728、2011.8

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤圭一（SATO KEIICHI）

尚絅大学短期大学部・その他・准教授

研究者番号：60435378

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし